様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３８９

研究課題名（和文）解釈学の転換：新約聖書解釈における新たな地平の探究と総合的な批評学援用の模索

研究課題名（英文）Hermeneutical Transition: Search for a New Horizon of the New Testament Interpretation and a Wholistic Application of Critical Methods

研究代表者
浅野　淳博（ASANO, Atsuhiro）

関西学院大学・神学部・教授

研究者番号：２０４０９１３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：読者に対する地平への意識を強く意識し、新約聖書の解釈手法を再評価し、新たな提案をした。各研究者は、専門とする批評方法がいかに読者に開かれ、読者を積極的に解釈へと介入させるか、その可能性を追求した。その結果として以下の成果を得た。１．研究代表者、研究分担者、研究協力者が新たな解釈を意識しつつ新約聖書各書の註解を手がけ、そのダイジェスト版を随時ウェブ上に公開した。２．期間中の研究会の成果を『新約聖書解釈の手引き』（日本キリスト教出版局）として2016年2月に刊行した。３．上記の共著の出版に際し、「新約聖書の読み方」と題するシンポジウムを開催した。４．2017年度に註解書３巻の発刊を予定している。

研究成果の概要（英文）：We evaluated both traditional and recent methods of interpretation of the New Testament and presented a fresh and wholistic approach to understanding the texts, making note of the new horizen of readers' perspectives. Each researcher, in the critical method that he/she is specialized in, took special care to pursue possibility of involving readers into the process of interpretation. The followings are the main results. 1. The researchers involved began the commentary work on an assigned book of the NT, and the digest of their works are made available to the wider public via the website. 2. The results of the research meetings during the study period were complied into a book titled, Invitation to the New Testament Interpretation, and published in Feb., 2016. 3. At the publication of the book, a symposium was held in Tokyo under the title of 'How to Read the New Testament', to which over 100 participated. 4. First 3 vols of commentary series are planned to be published in 2017.

研究分野：新約聖書学、とくにパウロ研究。中心となる解釈アプローチは社会科学批評

キーワード：新約聖書　解釈学　批評学

１．研究開始当初の背景

当初、研究代表者と研究分担者の計６名が参集したのは、新たな新約聖書註解書シリーズの可能性を検討するためであった。その際に、従来の註解書シリーズの貢献と限界を概観する中で、註解書執筆以前に明らかな解釈の方針を打ち立てる必要性を共有した。

そもそも「近代解釈学の父」と称されるシュライエルマッハーが一般解釈学の考察を行う際の基礎には、伝統的な新約聖書の釈義方法があった。したがって、上述の６名の新約聖書学者によるシュライエルマッハー以降の解釈学の評価と、新約聖書解釈への新たな提言には、十分な正当性があると考えた。

シュライエルマッハーによるテクストの文法的解釈と心理学的解釈、またこれを批判したガダマーの著者の地平と解釈者の地平との融合が、現在のテクスト解釈に閉塞感をもたらす理由を、それらが読者を置き去りにして行われることだという問題意識によって、新たな解釈学のアプローチの提言の方向性が定められた。

２．研究の目的

この研究の目的は、西洋古典の一部をなす新約聖書の解釈手法を再検討することをとおして、一般的に知られている解釈学のアプローチに新たな提言をすることである。

（１）一般にテクストの解釈においては、著者の地平と解釈者の地平とを融和させることに多くの努力が払われるが、この研究では読者の地平へと意識をさらに広げることを試みる。

（２）そして、今日における硬直的なテクスト解釈の傾向を克服するために、多様な批評学を総合的に取り入れることをとおして、多様な背景を持つ読者と多様な形態をとる文書群とをより密接に結びつける可能性を模索する。

３．研究の方法

一般的な方法の道筋は以下のとおりである。新約聖書解釈の歴史を概観し、いかなる思想的背景によって読者の地平が看過されてきたかを明らかにし、解釈者が読者の地平を意識しつつ解釈作業を進めるための方策を提案する。また文書形態の多様性に対して解釈者がいかにに対応してきたかを明らかにし、新たな可能性を模索する。

（１）計画上の枠組み：年２回の研究会において、それぞれの研究者が分担する新約聖書各書の研究を、それぞれの専門とする批評学をもとに遂行し、独自の専門分野の視点から、いかに読者の地平を解釈者の地平と融合させるかの提言を行った。

（２）外部の研究者を招いて講演を依頼し、研究代表者と研究分担者の専門以外の批評学の視点を取り入れた。本文批評学に関しては、関西学院大学の前川裕氏、フェミニスト批評学に関しては、青山学院大学の福嶋裕子氏にそれぞれ講演をしていただいた。また、カナダの Western University の Julius Kei Kato 氏には、遠隔地から論文発表による参加を依頼した。

（３）最終的な目標は、この新たな解釈方針の下で、新たな註解書シリーズを刊行することであった。したがって、研究代表者と研究分担者と研究協力者がそれぞれ分担する新約聖書各書の註解書の執筆を、行うとともに、その成果を隔月でウェブサイト上で公表し、読者の意見を募りつつ、読者の地平と解釈者の視点との親和性を確認する作業を行った。

（４）研究２年目終了時（平成２６年度末）のシンポジウム：「新約聖書学と現代の宣教：学問と実践の協働を目指して」を開催し、途中経過の研究内容を一般聴衆に投げかける機会を持った。このシンポジウムの開催は、読者の地平と解釈者の視点との親和性を確認する良い機会となった。

（５）読者の地平と解釈者の視点の親和性をはかる１つの方策は、読者の側へも解釈者の視点を分かりやすく理解してもらうことである。したがって、本研究の成果物として、『新約聖書解釈の手引き』と題する解釈論のガイドを執筆し、各批評学のアプローチを概説するとともに、それを実際にテクストへどのように適用するかを解説した。その際に、とくに読者の視点を意識的に取り入れる近年の批評学の試みを多数採用した。

（６）６名の研究者が参集した当初の目的は新たな註解書シリーズの出版であり、そのための解釈方針を確定することであった。したがって、２０１７年度に刊行予定の３巻（ガラテヤ書、ルカ福音書第１巻、ヨハネ書簡）をはじめとして、各執筆者がそれぞれ担当する新約聖書各書の註解書執筆を開始している。

４．研究成果

（１）ウェブサイトにおける解釈サンプルの公開：３年間の研究期間をとおして、１８名の研究者が割り当てられた書の註解のサンプルをウェブサイトに掲載した（http://bp-uccj.jp/publications/tokusetu/home)。各研究者が専門とする批評学を中心にまとめられた註解を対比することによって、「神学」以上に「適用」における多様性が顕著であることがあらためて確認された。

（２）一般聴衆を対象としたシンポジウムの開催：「新約聖書学と現代の宣教」と題したシンポジウムでは、本研究の内容が一般聴衆に向けて提示され、それに対する応答を受け取る機会となった。ここでは、読者の信仰という要素と歴史批評学とその他の伝統的批評学との乖離に関する懸念が示されるの

みならず、より読者を意識した新たな批評学（文芸批評、文化研究批評等）と伝統的な批評学との関係性に注目し、ある場合は両者が対立することにならないかという懸念が提示された。このことから、伝統的な批評学に慣れ親しんできた読者が、より読者の視点に近い批評学を安易に歓迎するわけではないことが明らかとなった。新たな批評学は、解釈者と読者の両方に対して十分な説得性を提示する必要がある。

（３）解釈論のガイド本『新約聖書解釈の手引き』（日本キリスト教出版局、２０１６年）の執筆：上述した事態を踏まえて、本研究の成果物のあり方が決定された。すなわち、伝統的な批評学と新たな批評学とを取り混ぜ、各批評学の形成過程をも含めた概説とともに、その批評学を適用した解釈のサンプルを提示することである。さらに、テクストを中心とした、文脈／筆者／解釈者／読者の位置関係を図式化し（図１）、各批評学がこの図式のどの部分に特化したものであるかを明らかにした。

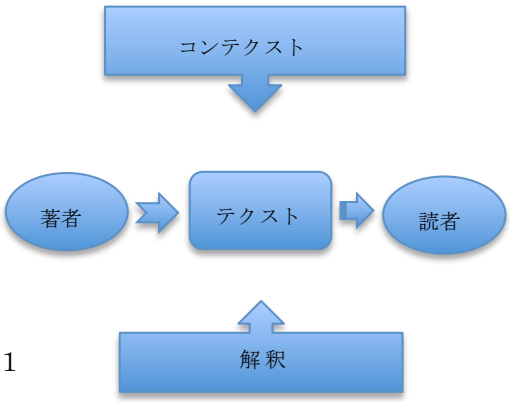

図１

この作業をとおして、各批評学が高い説得性をもって提示されるとともに、いずれの批評学もオールマイティではなく、それぞれの役割分担をわきまえてテクスト解釈を共有するという視点が、より健全な解釈に繋がることがあらためて確認された。これは、新たな註解書プロジェクトにおいて、その構成に示唆を与えるのみならず、シリーズの作成作業にも方向性を与えるものとなった。

（４）註解書シリーズ執筆の開始：各研究者はすでに執筆を開始しており、２０１７年度には最初の３巻（ガラテヤ書、ルカ福音書第一巻、ヨハネ書簡）が発刊予定である。上の考察を踏まえて、本註解書シリーズにおいては；

①「テクスト」
②「構成」
③「註解」
④「解説」

というアウトラインにしたがって執筆することが決定された。そうすることによって、読者は①において本文批評とテクスト翻訳、②において修辞学批評と文芸批評、③においてはそれらをも含めた他の批評学、④においてはとくに文化研究批評の視点からの考察が提示されることが明らかとなる。これは、上で示した各批評学の役割分担を意識した構成であり、テクスト解釈がこれらの作業の総体であるという理解に立っている。同時に、各研究者は自らの専門と専門外での限界とを意識しており、解釈が究極的には個人の作業でなく、専門性の高い編集委員の意見や読者のフィードバックをも含めた総合的な作業でなければならないことを強く意識している。その意味で解釈は、解釈の共同体による、解釈の総体であることが確認された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）

①浅野淳博、「塵芥について（Ｉコリ 4:13b）：イエス受難のメタファに関する一考察」、『新約学研究』、査読有り、44（2016）頁未定。

②Atsuhiro Asano, ’Like the Scum of the World, the Refuse of All: A Study of the Background and Usage of Περίψημα and Περικάθαρμα in 1 Cor. 4.13b’, *Journal for the Study of the New Testament*, 査読有り、39.2（2016）頁未定。

③中野実、「聖書正典（カノン）と『信仰の規範（カノン）』:その相互作用について」、『伝道と神学』、査読無し、6（2016），121-36.

④浅野淳博、「古代地中世界の追放儀礼に関する一次文献の分類と解説」、『神學研究』、査読無し、62（2015），131-51.

⑤辻学、「排除か？共棲か？：第二テサロニケ書の執筆意図をめぐって」、『新約学研究』、査読有り、43（2015），41-54.

⑥Atsuhiro Asano, ’”With Regard to These Things, There Is No Law”: Is Paul Positive about the Law in Gal 5-6?’, *Kwansei Gakuin University Humanities Review*, 査読無し，18（2014），1-8.

⑦浅野淳博、「『福音にのっとった殉教』によるインクルーシオ：『ポリュカルポス殉教物語』の文学的考察」、『聖書学論集』、査読有り、45（2013），99-120.

⑧伊東寿泰、「ヨハネ福音書における贖罪信仰：文学的方法による分析」、『聖書学論集』査読有り、45（2013），149-84.

〔学会発表〕（計５件）

①Tsuji Manabu, ’From the Baptism of John to the Baptism in the Name of Jesus Christ (Acts 18:24-19:7): Unification of Baptism in Earliest Christianity?’, Studiorum Novi Testamenti Scietas, McGill

University, Quebec, Canada, 2016.8.2-5.

②浅野淳博、「塵芥について（Ｉコリ 4:13b）：イエス受難のメタファに関する一考察」、日本新約学会第 55 回学術大会、青山学院大学（東京都渋谷区）、2015.9.8-9.

③ Atsuhiro, Asano, 'Responses to the Critique on "Galatians 2.1-14 as Depiction of the Church's Early Struggle for Community-Identity Construction"', at Society of Biblical Literature Annual Meeting, San Diego, USA, 2014.11.22-25.

④辻学、「排除か？共棲か？：第二テサロニケ書の執筆意図をめぐって」、日本新約聖書学会第５４回学術大会、広島女学院大学（広島県広島市）、2014.9.12-13.

⑤Atsuhiro Asano, 'Motherliness of God: A Search for Maternal Aspects in Paul's Theology', at Institute for Biblical Research Annual Meeting, Baltimore, USA, 2013.11.21-23.

〔図書〕（計６件）
①浅野淳博、伊東寿泰、須藤伊知郎、辻学、中野実、廣石望、前川裕、村山由美、『新約聖書解釈の手引き』、日本キリスト教出版局、2016 年（pp336）。

②Atsuhiro Asano, 'Motherliness of God : A Search for Maternal Aspects in Paul's Theology', G.L. Green, S.T. Pardue, K.K. Yeo (eds.), *The Trinity among the Nations* (Grand Rapids: Eerdmans, 2015), 120-139 (pp174).

③Hisayasu Ito, *The Story of Jesus and the Blind Man: A Speech Act Reading of John 9* (Acta Theologica Supplementum; Univ. of the Free State, 2015), pp524.

④中野実、浅野淳博、伊東寿泰、須藤伊知郎、辻学、廣石望、『共同研究：新約聖書学と現代の宣教：学問と実践の協働を目指して』、日本キリスト教出版局、2015 年（pp86）。

⑤Atsuhiro Asano, 'Galatians 2.1-14 as Depiction of the Church's Early Struggle for Community-Identity Construction', in J.B. Tucker and C.A. Baker (eds.), *T. & T. Clark Handbook to Social Identity in the New Testament* (T. & T. Clark Bloomsbury, 2014), 311-332 (pp680).

⑥日本聖書学研究所監修（浅野淳博、辻学、廣石望、他）『聖書学論集 64　聖書的宗教とその周辺』(リトン、2014)、455-480, 531-550, 591-616 (pp725).

〔その他〕
ホームページ等
http://bp-uccj.jp/publications/tokusetu/home

６．研究組織
(1)研究代表者
浅野　淳博（ASANO, Atsuhiro）
関西学院大学・神学部・教授
研究者番号：２０４０９１３９

(2)研究分担者
伊東　寿泰（ITO, Hisayasu）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：３０３５２４３８

辻　学（TSUJI, Manabu）
広島大学・総合科学研究科・教授
研究者番号：５０２９９０４６

廣石　望（HIROISHI, Nozomu）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：６０３３９８１９

中野　実（NAKANO, Minoru）
東京神学大学・神学部・教授
研究者番号：７０３４９７８６

須藤　伊知郎（SUDO, Ichiro）
西南学院大学・神学部・教授
研究者番号：８０３０９８６４